〈資料論文〉

人の誕生を題材とした命の授業における中学生の学び

光武智美
（上智大学）

Junior high school students' learning in life classes on the birth of people

Tomomi Mitsutake
Sophia University

キーワード：命の授業，助産師，中学生
KEYWORDS: life classes, midwife, Junior high school students

抄録

本研究は，平成 29 年（2017 年）に A 中学 1 年生 4 クラス 152 名（男子 72 名，女子 80 名）の集団に対して，助産師である筆者が人の誕生を題材にして行った，命の授業後の生徒の感想から生徒の気づき（学び）を整理・カテゴリ化し，それぞれのカテゴリ（サブカテゴリ）間の関係を考察することで，命の授業を構想する際の教育内容の選択と学習順序の在り方についての示唆を得ることを課題とした。生徒の気づきを内容分析した結果,【胎児の存在の思考】と【生まれるまでの理解】の情報が刺激となり【育ててくれる人の思いの理解】につながっていた。【育ててくれる人の思いの理解】が原動力となって【命の再考】起こり【今を生きる大切さの実感】につながっていた。【今を生きる大切さの実感】することが，さらに【これからの生き方の思考】へと発展していた。胎児の成長過程という人の誕生を題材にした体験型の命の授業を行うことで「自分や自分以外の人々の命について考える機会」になり,「どのように生きていきたいかを考えるきっかけをもつ」ことがわかった。

１．はじめに

令和２年度（2020 年度）から実施されている新たな学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」を掲げ，その実施にあたっては地域の人的資源等を活用し，学校教育を社会と連携しながら実現することが示されている（文部科学省，2017）。教員に加え，専門スタッフ等の参画を得て，多様な価値観や経験を持った大人と接したり議論したりすることは，

子供たちの教育活動の充実が期待できると提言されている（文部科学省，2016）。

筆者は外部講師として人の誕生を題材にした命の授業をこれまでに延べ 8,500 人の児童生徒らに実施している。筆者が平成 27 年（2015 年）に A 中学校 1 年生へ実施した「命の授業」で，「命の大切さ」について学び，「自尊感情」や「感謝」などを実感するなど，自分自身の命について考えるきっかけになっていた（光武，2019）。外部講師を活用した命の教育は，救急医が「自分の身体を知る」という目的で行われていたり（中田・矢口，2016），助産師による自分らしさを考える命の授業を行ったり（加藤・高岡・鹿野・小田，2010），各学校において進めている現状がある。都道府県助産師会の報告では，6 県で「命の大切さを伝える授業」，5 府県で「性教育」，1 県は「命の大切さを伝える授業」及び「性教育」が学校で行われている（三輪・青島・稲葉，2020）。

しかしながら，外部講師を活用した命の教育に関しては，いくつか課題が存在する。その一つとして，命の授業においては様々な職種の専門家が外部人材になる可能性があり，モデルとなる標準的な授業がない。外部講師に一任される状況では学校の目標に応じた授業が行われず，授業評価も感想文の記入のみで行われている可能性がある。また，授業の目的やねらい，誰がどのように授業を行うのかなどの学校と外部講師間での協議は十分でなく，学校や子どもたちのニーズに十分に応じられていないことも考えられる。筆者が平成 27 年（2015 年）に A 中学校 1 年生へ実施した「命の授業」でも，授業のねらいが学校側から示されることはなく，カリキュラムの位置付けも不明瞭であり，根拠をもとにした授業が行えていない。授業の感想を内容分析したものの，その方法は妥当であるとは言えず，感想を整理したに過ぎなかった。一方で，感想の中には本授業の「目的」につながる要素が存在するのではと考える。

本研究は，筆者が平成 29 年（2017 年）に行った中学 1 年生への命の授業での感想 から生徒の気づき（学び）を整理・カテゴリ化し，それぞれのカテゴリ（サブカテゴリ）間の関係を考察することで，命の授業を構想する際の教育内容の選択と学習順序の在り方についての示唆を得ることを課題とするものである。

助産師は妊娠・出産の関わりを中心とした母子の健康を支援する命に関する専門職である。外部講師の活用では学校と専門職がチームとなり，子どもたちの課題解決のための教育活動を充実していくことが期待されており（文部科学省，2016），本研究によって，助産師が行う命の授業が「社会に開かれた教育課程」の一実践として位置付けられることが可能になると考える。

２．方法

２．１　調査手続き

2017 年 2 月，A 中学校の 1 年生 4 クラス 152 名（男子 72 名，女子 80 名）に対して，筆者が行った命の授業後，同対象に授業の感想を記載してもらった。

具体的には, A 中学校の校長へ研究協力依頼文および承諾書を送付し承諾を得た。また，生徒の保護者宛てに研究協力依頼文を学校より配付してもらい，協力いただけない場合のみ学校へ連絡を入れていただくようにお願いした。生徒へは事前に担任から研究協力依頼文を渡してもらうとともに，研究に参加しない場合でも成績への影響など不利益は全くないということを口頭で説明を加えてもらった。さらに，調査実施時，質問紙配付時に，研究に参加しない場合でも不利益を被らない旨, 質問紙には氏名や学校名を記入しないよう，担任より口頭で説明を加えてもらった。生徒からの回収は学校内に設置した回収箱への投函をお願いした。

２．２　授業の概要

A 中学校の 1 年生 4 クラス 152 名（男子 72 名，女子 80 名）の集団に対して筆者が授業を行った。授業のねらいは『「胎児の成長過程」を通して，自分自身や周囲の人々の命について考える』機会とすることである。このねらいを達成するために，以下の構成で授業を行った。

【導入】10 分

（1）助産師の仕事と命のつながりの話

・助産師の仕事と助産師が命の授業を行うことについての説明。

（2）命のはじまりとつながりの話

・受精卵をイメージしたカード[教材 1]を使用し，自分たちの命の始まりの大きさと受精卵になる確率について説明。

・先祖の命がつながってきたことで自分たちの存在があることの話。

【展開 1】20 分

（3）胎児人形の抱っこ体験（羊毛フェルトで本物の重さと大きさを再現して作成）[教材 2]

【展開 2】10 分

（4）胎児の成長の話

・呼吸や心臓が動き始める時期についての説明とそのときの親などの周囲の大人の反応についての話。

・胎盤とへその緒の役割についての説明とお腹の中で守られながら育ったことの話。

・胎児を育てる期間の人々の思いについての話。

【まとめ】10 分

(4)「いのちのおもさ」本の朗読（スライドショー)。[教材 3（オリジナル写真絵本「いのちのおもさ」で作成した胎児の成長過程の動画）https://youtu.be/lsBznOzl2UU]

２．３　分析方法

生徒の自由記述であるデータの内容分析を行った。生徒の自由記述を，連結不可能匿名

化の処理を行い，コード化した。コード化した文章を一つの意味をもつ文に区切った（小カテゴリ）。小カテゴリを類似した内容にまとめて，サブカテゴリ（以下,「」で示す），カテゴリ（以下,【　】で示す）へと集約した。カテゴリにおいて生徒の感想の軸になるものを焦点化し，それを促進する要素は何かを検討した。分析過程において，筆者以外に，統計解析を専門とする教育学及び看護学の専門家，それぞれ一名を交えて検討を行い，信頼性・妥当性の確保に努めた。

２．４　倫理的配慮

本調査は，上智大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認（NO.2016-23）を得て行った。

研究協力依頼書に，調査は個人や学校が特定されないこと，研究参加しなくても成績など学校生活への影響は全くないことなどを明記した。回収箱への提出を持って，本調査へ同意を得たものとみなした。

３．結果

本調査の回答者は，中学 1 年生 152 名（男子 72 名，女子 80 名）であった。生徒全員から回答が得られた。

自由記述の分析の結果，6 つのカテゴリが得られた。【命の再考】は,「自分の命を考える」「家族の命を考える」「友人の命を考える」の 3 つのサブカテゴリから構成された。【胎児の存在の思考】は,「胎児の重さを実感する」「胎児の成長を知る」の 2 つのサブカテゴリから構成された。【生まれるまでの理解】は,「命のはじまりを知る」「どのようにして生まれたかわかる」の 2 つのサブカテゴリから構成された。【育ててくれる人の思いの理解】は,「親の自分への思いを知る」「家族の自分への思いを知る」「周囲の苦労・気持ちを知る」の 3 つのサブカテゴリから構成された。【今を生きる大切さの実感】は,「生存の奇跡を実感する」「生きていることの意味を感じる」の 2 つのサブカテゴリから構成された。【これからの生き方の思考】は,「命を大切にしたいと思う」「感謝したいと思う」の 2 つのサブカテゴリから構成された。結果を表 1 に示す。

カテゴリにおいて生徒の感想の軸になるものを抽出し，その軸を促進する要素は何かを検討した。結果を図 1 に示す。【胎児の存在の思考】と【生まれるまでの理解】の情報が刺激となり【育ててくれる人の思いの理解】につながっていた。【育ててくれる人の思いの理解】が原動力となって【命の再考】起こり【今を生きる大切さの実感】につながっていた。【今を生きる大切さの実感】することが，さらに【これからの生き方の思考】へと発展していた。

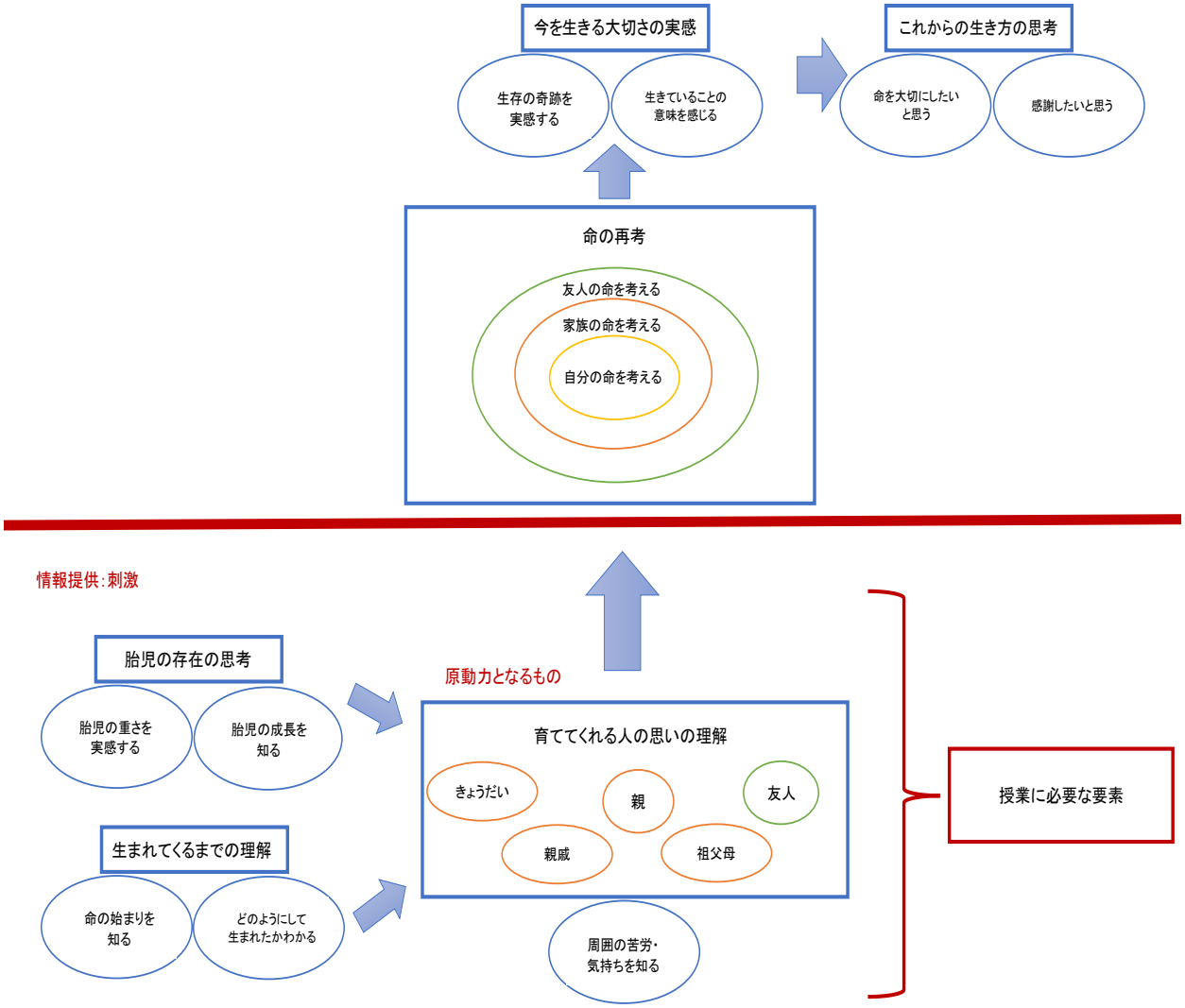


図1　カテゴリのつながり（イメージ図）

表1　人の誕生を題材にした命の授業における生徒の気づき

カテゴリ	サブカテゴリ
【命の再考】	「自分の命を考える」 「家族の命を考える」 「友人の命を考える」
【胎児の存在の思考】	「胎児の重さを実感する」 「胎児の成長を知る」
【生まれるまでの理解】	「命のはじまりを知る」 「どのようにして生まれたかわかる」
【育ててくれる人の思いの理解】	「親の自分への思いを知る」 「家族の自分への思いを知る」 「周囲の苦労・気持ちを知る」
【今を生きる大切さの実感】	「生存の奇跡を実感する」 「生きていることの意味を感じる」
【これからの生き方の思考】	「命を大切にしたいと思う」 「感謝したいと思う」

４．考察

本研究は，筆者が平成 29 年（2017 年）に行った中学 1 年生への命の授業での感想 から生徒の気づき（学び）を整理・カテゴリ化し，それぞれのカテゴリ（サブカテゴリ）間の関係を考察することで，命の授業を構想する際の教育内容の選択と学習順序の在り方についての示唆を得ることを課題とするものであった。

授業後の生徒の感想において，【命の再考】に向かう要素，【命の再考】によって発展する要素がそれぞれつながっており（図 1)，軸となるカテゴリは【命の再考】であると考えられた。【命の再考】は「自分の命を考える」「家族の命を考える」「友人の命を考える」といったサブカテゴリから構成されており，命を考え直す「振り返り」という特徴があった。「振り返り」によって認知欲求が高まるということがわかっている（石原・秦山，2020)。学校教育において，社会の様々な変化に対しても他者と協働して課題を解決していくこと，様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることなどが求められているおり（文部科学省，2017)，このような力を育成するために認知欲求は重要であると考える。また，「自分の命を考える」ことで，家族や友人といった，自分以外の人の命を考えることにつながることが考えられ，この点においても「振り返り」が必要である。

【命の再考】は【今を生きる大切さの実感】につながっており，自分の存在価値や大切な存在であることを感じ，その命を大切にして感謝しながら過ごしたいなど，さらに【これからの生き方の思考】につながっていた。小学 5 年生，中学 2 年生，高校 2 年生を対象にした伊藤（2016）の調査では「生きる意欲に関わる項目」（今を大切に生きていきたい，生きていることはすばらしい，生まれ生きていることは奇跡だ，など）と自己肯定感情には関連性があり，「生きる意欲」を育てることが大切であることを明らかにしている。昨今，生命軽視の軽はずみな言動が，いじめなどの社会的な問題となることもあるとの指摘（文部科学省，2017）を考えても，この先を想像するという行動は重要な気づきである。【命の再考】を行うことが【これからの生き方の思考】へと発展することから【命の再考】を促進させる要素が重要と考える。この【命の再考】を促進させた要素として【育ててくれる人の思いへの理解】が考えられた。「親の自分への思い」「家族の自分への思い」「周囲の苦労・気持ち」の気づきがあったことが，「自分の命を考える」「家族の命を考える」「友人の命を考える」ことにつながったと考える。家族や友人との関係と自己肯定感が関連している（栗田，2019）ことがわかっており，自分→家族→友人といった人間関係の広がりを思考し，自分以外の人の命を大切に思うことは，その関係を良好にする上でも大切である。自分への思いに気づくことが自分以外の人への思いを思考する原動力になる可能性を考えると，中学生期でも様々な人の思いに触れる経験というのが大事になると考える。この点は新たな学習指導要領でも求められる「社会に開かれた教育課程」の実現にも関連すると

考える。

【育ててくれる人の思いへの理解】は【胎児の存在の思考】と【生まれるまでの理解】の知識を得たこと，「胎児人形の抱っこ体験」という体験によって生徒の感情が刺激され，【命の再考】への原動力となったのではないかと考えられる。胎児の存在は言うまでもなく外から見えるものではない。また，誰もが胎児の時期があり，胎児の成長過程を経て生まれてきたことで，今の自分がいるが，その過程を記憶しているわけでもない。しかし，「胎児人形を抱っこする」という「体験」を通して，胎児には重さがあり，成長していくという，胎児と自分は同じ「人」としての存在であることを学んだと考える。さらに，その胎児が生まれてくるためには，命がどのように始まって，どのくらいの時間がかかるのかという【生まれるまでの理解】を自分の出生と重ね合わせながら実感していったのではないかと思われる。

生命を尊ぶためには，まず自己の生命の尊厳，尊さを深く考えることが重要で，生きていることの有り難さに深く思いを寄せることから，自己以外のあらゆる生命の尊さへの理解につながるように指導することが求められている（文部科学省，2017)。「命を大切にしよう」などと，本研究における図 1 カテゴリつながり（イメージ図）でいう【これからの生き方の思考】をいきなり教えるのではなく，そのような思考に至る原動力を教えることが重要なのではと考えられた。

母子の健康を支援する命の専門家である助産師が人の誕生を題材にした体験型の授業を行うことで，生徒は「自分や自分以外の人々の命について考える機会」になり，「どのように生きていきたいかを考えるきっかけをもつ」可能性があることがわかった。

５．結論

胎児の成長過程という人の誕生を題材にした体験型の命の授業を行うことで，生徒は「自分や自分以外の人々の命について考える機会」になり，「どのように生きていきたいかを考えるきっかけをもつ」ことがわかった。この気づきのために重要な【命の再考】という自分自身を振り返ることを学んでいた。

しかしながら本研究は，一実践での成果であること，分析方法に量的研究手法を用いていないため，分析者の主観に偏った結果になっている可能性も否定できない。今後は，客観的に信頼性，妥当性を高める研究手法を用いて調査及び分析する必要がある。

引用文献

石原浩一・秦山裕（2020)「フィードバックと振り返りが 学習者の認知欲求に及ぼす影響の検討」,『日本教育工学会論文誌』 第 44 号 1 巻，105-11.

伊藤美奈子（2016)「子どもたちの「生きる意欲」といじめ－尺度項目の収集といじめ経験との関連」,『日本教育心理学会第 58 回発表論文集』 471.

加藤千恵子・高岡哲子・鹿野友恵・小田明美（2010）「小学第 5 学年の自己概念とジェンダー・アイデンティティに関連した実態調査－「命の授業」前後の比較から－」,『名寄市立大学紀要』, 4, 17-25.

栗田克実（2019）「中学生の生活実態と自己肯定感に関する基礎的分析」,『保健福祉学部紀要』11 巻, 23-27.

光武智美（2019）「外部講師による「いのちの授業」－大分県 A 中学校での取り組み－」,『早稲田大学教師教育研究所紀要』第 9 号, 162-165.

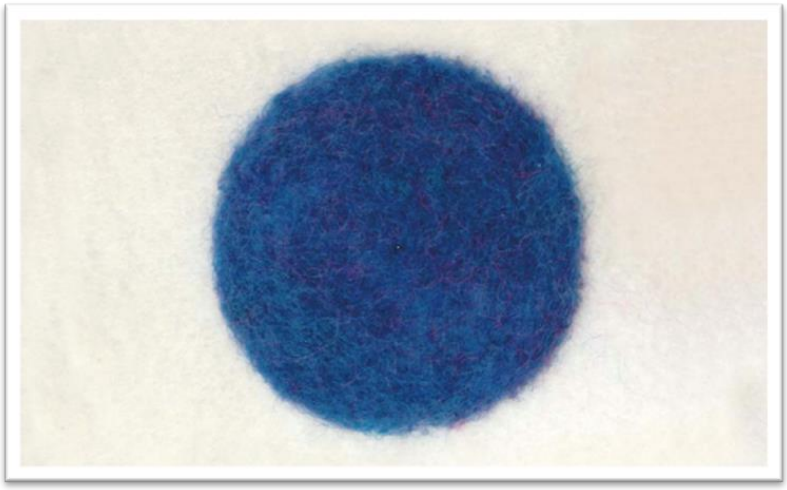
三輪壽江・青島恵美子・稲葉由子（2020）「2019 年度都道府県助産師会子育て・女性健康支援センター活動報告」,『公益社団法人日本助産師会機関誌』第 74 号 4 巻, 63-78.

文部科学省（2016）「チームとしての学校の在り方」, Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1365408.htm（2021 年 12 月 1 日）

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説」, Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_001.pdf（2021 年 12 月 1 日）

中田託郎・矢口有乃（2016）「小学校での講演の経験～キャリア教育と命の教育」,『静岡赤十字病院研究報』第 36 号 1 巻, 1-4.

教材 1（受精卵カード）



教材 2（大きさと重さを実際と同様に制作した羊毛フェルト製胎児人形）